

寮生活の経験に関する質的研究

－ 高校時代に寮生活を送った女性の語りから －

石 田 愛

【問題・目的】

寮生活は集団生活であり、学校生活の延長であると思われがちであるが、そこで生活する生徒にとっては「日常生活の場」である。近年では交通機関の発達もあり、寮の必要性はあまりみいだせないという議論もある。しかし、今泉(2000)は、単に居住施設だけでなく、重要な教育施設として存在していると述べ、山崎・郷木・中桐(2005)は、家族や今までの友人関係から離れることで、自分自身と家族をも含めた人間関係を見つめ直す場になっている、と述べている。このことから、寮は単なる共同宿舎ではないと言えるのではないかと考えられる。

家庭生活や学校生活に比べても、寮という集団の中での「日常生活の場」における対人関係のストレスは非常に大きいと言えよう。友人関係や上下関係、相部屋によるストレスや寮規則、寮行事における時間の拘束など様々な要因が考えられる。

寮に関する研究では、寮生の友人関係やストレスに焦点を当てたものがある(松尾, 1971; 工藤, 2002; 稲葉, 2007; 高木, 2008)が、寮生活そのものを対象とした研究はない。そこで本研究では、高校生の時に寮生活を送った女性を対象に、個人個人の寮生活の経験がいかなるものだったのか。また、経験者にとってどのようなものであったかを質的研究方法によって検討し、寮生が安定した生活を送れるための一助にしたい。そして、以下のようなリサーチクエスションのもとでインタビューを行い、ひとりひとりの個別性の中から浮かび上がってくる共通のテーマを探っていきたい。

リサーチクエスション

①寮生活を送った人にとって、寮生活がどのような経験として位置づけられているのか。

②困難があった時どのように対処してきたのか。

③家族との関係に変化があったとするとどのようなものであるのか。

④寮生活を送る3年間の中で、どのように経験の意味が変わってきたのか。

⑤寮生活を送り終えた現在、寮生活をどのように捉えているのか。

【方法】

調査方法：寮生活に関する半構造化面接。

調査時期：平成24年4月～8月

調査協力者：寮生活の経験がある20代の女性4名。

手続き：研究協力を依頼し、日程の調節を行った。インタビューの趣旨と倫理的配慮の説明を行い、同意書に署名して頂いた。また、インタビューの前にフェイスシートに記入して頂き、当時の寮生の人数や、寮の職員(寮母)の人数なども併せて記入して頂いた。

質問項目：寮の設備の構造がどうであったか、寮に入ることにどう思っていたか、印象に残っていること、楽しかったこと、大変だったこと、家族の関係に何か変化があったか、振り返ってみて自分にとって寮生活がどうであったかなどをお聴きした。

分析方法：現象学的アプローチによる分析を行った。

【結果・考察】

寮生活を経験された方の語りから、経験者にとって寮生活がどのようなものであったかを検討した結果、＜不安＞＜つらさ＞＜ホームシック＞＜慣れ＞＜支え＞＜経験の捉え直し＞というテーマが現れてきた。以下、テーマに沿って考察していく。
不安 寮生活を経験した者にとって、寮生活を始めることは“不安”であった。「集団生活が上手くいくか」「どんな感じなんだろう」という漠然

とした気持ちをもった上で、寮生活を始めていた。つらさ 寮生活を経験する中で、先輩―後輩の上下関係に悩まされていた。同時に、寮の規則などによる制限についても苦しさを感じていた。「全然自由でなかった」「きつかった」と上下関係と寮の規則について語り、先輩に気を遣い続けるなかで生活していた。上下関係や寮の規則は、自分で耐えられる方法を見つけることができず、自分ではどうすることもできないことのように感じられた。そこには“つらい”思いがあり、耐えがたいものであった。

ホームシック 寮生活をする中で、ホームシックを経験していた。特に入寮した最初の3ヶ月になっており、「新しい環境への適応困難」「新しい慣習への適応困難」「新しい習慣への適応困難」をきたしていたことが窺がえた。また、協力者の文脈から、ホームシックは、適応する、適応できない、という問題よりも、その状況をどう切り抜けるかについて、左右されているようであった。

慣れ 寮生活において、慣れることはあきらめであり、気を遣わなくなることであり、寮生活が楽しくなるためのものであった。寮の規則については「仕方がない」という思いを受け入れながら慣れていけるようであった。しかし、先輩に気遣うことや、上下関係という人間関係の文化には慣れることが難しいことが窺がわれた。また、「もう3年生の時は（家に）帰ってこなかったよね」という語りからも分かるように、3年間、寮で生活するうちに、学校から“戻る”所でなく、学校から“帰る”場所になっていたように思われた。

支え つらい時、ホームシックになった時に、支えてくれたのが、友人であったことが語られた。友人は、愚痴を言える存在であり、ともに泣き、励まし合う存在であった。また、屋上やお風呂という空間も支えになっていた。そこには友人の存在があり、ともに同じ空間で時間的経験をすることで、解放感や安心感をもたらしていた。

経験の捉え直し 経験を捉え直し、経験の意味づけを行いながら、寮生活をしたことによって変化のあった自分の存在と、家族から言われて気付いた自分の存在があったことが語られた。そして、寮生活の経験が「プラスになる」「いい経験だっ

た」「良かった」と話しており、過去を意味づけることで、自己成長感につながっていた。

【総合考察】

Van Tilburgら(1996)は、ホームシックが深刻になれば、適応障害に繋がるとしており、ホームシックのタイプがどれであるかということを知った上で、支援することが、治療的アプローチになるとしている。協力者の語りでは、「環境へのホームシック」「新しい環境への適応困難」「新しい慣習への適応困難」が見受けられ、上下関係の文化に慣れること、気遣いを続けることに慣れることは難しいことが窺がわれた。通学生は学校から家に帰り、学校の規則や規律から一息つくことができるが、寮生は、学校から寮に戻っても自分が3年生になるまで、先輩に気遣いを続けなくてはならない。そのことを考えると、1年生、2年生の負担が大きいと言える。そのため、1年生、2年生が安心して一息つけるような空間が必要であり、その空間をともに時間的経験ができる友人の存在が必要であると思われる。また、悩みや不安などを相談できる場所と、カウンセラーなどの支援が必要であることも示唆された。そして、協力者から語られたことを、寮母や学校、家族が知ること、寮生が困っているとき悩んでいるときに、どんなサポートができるのか、そのことをチームになって話し合い、実践することで、よりよい支援につながるのではないと思われる。

【今後の課題】

今回の語りでは、家族のこと、友人のことについての語りがあまりみられなかった。可能性として、中学を出たばかりの時期に、3年間家を離れることが大きな出来事であったため、寮で生活することだけでも大変であり、家族のことを考える余裕もなかったと協力者が感じていたことが考えられる。また、友人や先輩、後輩にどのような人がいたか、どのような人に困りを感じたかなどの、具体的な人間関係についても語りがみられなかった。そのため、今後は、具体的な人間関係についての考察も必要であると考えられる。